

# 本年度大会に望む

(愛知) 川 越 洋 二

間もなく今年の大会が開かれることになりました。日頃同学の士と語りあう機会に恵まれない私たち地方在住のメンバーにとつては、年一回の大会は、旧知の諸学兄の乗継に直接ふれると同時に、親しく御教示を受けることのできる爽りおおい場所であり、今から胸が高鳴るのをおぼえます。昨年はやむなく欠席した私は、今年是非討論に参加させて頂いて、今までのいろいろの疑点について、御指導を得たいと思つておりました。丁度その時、大会について希望をのべるようにとの連絡をうけました。すでに過去三回の大会に共通する批判、反省として、討論時間の不足、質疑応答の不活発などがあげられておりますので、今年はこの轍をふみたくないものです。けれどもこれについていままさら意見や希望をのべようとは思いません。前者は大会運営者の手腕に期待できますし、後者は私たち一人一人の責任であるからです。そこで、私は村研の今後の研究のあり方について私見をのべてみたいと思ひます。

研究通信などをみると、村研のメンバーがこの研究会に期待し、おし進めたいと考えていることは大体次の事柄ではないかと想像します。

- (1) 共同課題をもつこと。
- (2) 各専門分野の提携および概念の共有化。
- (3) 調査項目および指標の標準化。

才一の期待はいままでであるていど果されていと思ひますが、いままでは次元のことなる課題を考える必要はないでしょうか。おおくの会員が指摘しているように、村研の仕事が単なる学問的成果におわらず、農民の生活に何物かとプラスするものであることが重要で、これは私も強調するところで、そしていままでの共同課題が、実際にプラスしたかどうかは別として、その線に沿つて設定されてきたことは誰方も否定しないでしよう。けれどもそうした課題をとり上げながら、いままでの共同研究は各専門分野の研究成果の交際の域をでておりません。現状では各分野の専門家協力して一つの対象を解明する段階に至つておりません。この種の共同研究の必要は当然であり、それを望む声も研究通信などにポツポツあらわれていますが、これはなかなか実現できにくいと思ひます。その原

因の一つは、それぞれの科学の使用する概念が個々バラバラであることだと思ひます。

各科学の心からの提携は概念の共有あるいは相互理解によつて各科学が村落研究における自己の役割を認識するときに可能になると思ひます。そのための努力がもう考慮されてよい時期ではないでしょうか。そしてこれが結局こんごの研究のためのフレーム、オブ、レフアレンスを提供することになるでしよう。

調査項目や指標の標準化の問題もかなり前から提言されてきています。もちろん具体的な調査対象はそれぞれ特殊な存在ですから、あるところで有効なものが、他の場所では不向ということもあり、すべての標準化は困難であり、不用でもありませんが、基礎的なものだけでも、あるていどの標準化がなされないかぎり比較研究は困難であり、全体としての村落研究を進めることができないでしよう。私はこれが切急にできるとは思ひませんが努力しなければならぬ問題だと思ひます。多くのメンバーが一定のフレームによつて、それぞれが自己の役割を認識しつ、全国をいくつかのブロックにわけて共同調査を行う。その結果を比較検討しつ、つぎのフレームと方法とを樹立してゆく。

それこそ実証的理論的研究であり、村研の仕事もそこまで発展すべきでありましょう。研究にはつねに問題意識が重要であることは充分承知しているつもりですが、現在の共同課題に充分について行けない多数のメンバーのあることを知っている上に、こうした課題のとりあげ方や、分科会あるいは研究体制をつくることの可否について、大会の席上では非とも議題として頂きたいと思えます。

(東京) 大内 力

他の学会のことは知らないが、経済学関係の学会は、大てい低調でつまらない場合が多い。それには色々理由があるが、その最大の理由のひとつは、学会に出てくる人が、あまり自分の専門にこだわりすぎるためではないかと思う。そこで報告の方も非常に狭い専門の中でおこなわれるし、討論も専門の枠の中でおこなわれる。だから少し専門のはずれた者には興味がうすいし、またそういう人はそういう人で、

それは自分の専門外のことだといふわけで、報告も討論も黙殺してしまうために、いつそう学会が低調になるのである。村研の大会はもう少し専門からぬけてたものでありたい。

素人論議でもいいから大胆に議論を展開したい。それがじつは専門の発展のためにもおまじいことであらう。

(大阪) 山 本 登

村研のメンバーとして、あまり仕事らしい仕事をしないうちに、又大会の時期がきました。村落研究から遠ざかったわけではありませんが、昨年から本年にかけては、未解放部落の研究や、近郊農村の問題とかいつた、あまり農村らしくない方向での研究に従事しました。人口の現象にしても農村の中で全く特異の傾向をもつブランクの問題は、やはりたとえマイ

ノリテイであるとしても研究の価値は充分にあると思えます。

また近効の場合は逆の現象がでてくるわけですが、純農村の少ない関西のような場合、このあたりの視野も単に兼業とか脱農という概念では捉えられないものがあると考えられます。

本年度はこういう視野から討論にも参加し、会員諸氏の御意見を拜聴したいと思えます。討論に充分な時間をとられんことを希望します。

(仙台) 竹内 利美

大会は会員が顔を合せて話し合う唯一の機会であるから、まずなるべく多数の参加者のあることが肝心。その点で昨年は少々さびしかった。今年は場所は東京、期日は社会学会の前々日という好条件なので、まず量の上で盛会が期待できるようだ。そこで次は内容の充実という注文ができる。それは何より「共同討議」の出来ばえ如何にかかっている。発表者を三人にしぼり午後を全部それにあてたので、時間はたつぷりあると思う。結局、本節の問題に即した論議の展開、なるべく多数の活潑な発言が切に望まれるわけだ。